

## 平成28年度病虫害発生予報第4号

長崎県病虫害防除所長

## 【予報の概要】

農作物名	病虫害名	発 生 程 度	
		現 況	予 想
早期水稲	いもち病（穂いもち）	—	やや多
	紋枯病	並	並
	穂吸汁性カメムシ類	並	並
普通期水稲	いもち病（葉いもち）	やや多	やや多
	紋枯病	並	並
	縞葉枯病	やや少	やや少
	セジロウンカ	並	並
	トビイロウンカ(防除情報第6号)	並	並
	コブノメイガ(防除情報第6号)	やや少	並
大豆	ハスモンヨトウ	—	やや多
いちご (育苗床)	うどんこ病	少	少
	炭疽病 ( <i>Glomerella cingulata</i> )	並	やや多
	輪斑病	並	並
	ハダニ類	やや多	やや多
アスパラガス	斑点性病害（褐斑病、斑点病）	並	並
	アザミウマ類	並	並
かんきつ	かいよう病	やや多	やや多
	黒点病(防除情報第7号)	やや多	多
	ミカンハダニ	やや多	やや多
	チャノキイロアザミウマ	少	やや少
びわ	がんしゅ病	やや少	やや少
	灰斑病	並	並
	ナシヒメシンクイ	並	並
なし	ナシヒメシンクイ	並	並
ぶどう	べと病	並	やや多
果樹共通	果樹カメムシ類	少	少
茶	炭疽病	やや多	やや多
	チャノキイロアザミウマ	並	並
	チャノコカクモンハマキ	並	並
	チャノホソガ	並	並
	カンザワハダニ	並	並
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	並
	クワシロカイガラムシ	並	並

早期水稲
------

## 1. いもち病（穂いもち）

平成28年6月30日付け**病害虫発生予察防除情報第5号**を継続。

なお、その後の発生状況については以下のとおりである

## (1) 発生状況

ア 7月上旬の巡回調査（41筆）の結果、葉いもちの発病株率は4.6%（1.0%）、発生圃場率は34.1%（17.5%）であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発病株率は6.0%（発生を認めない）であった。

ウ 向こう1か月の降水量は平年並か多い見込みである。

## 2. 紋枯病

## (1) 予報内容

発生程度 並

## (2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査（41筆）の結果、発病株率は0.3%（0.2%）、発生圃場率は7.3%（8.0%）であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発病株率は29.0%（17.8%）であった。

## 3. 穂吸汁性カメムシ類

## (1) 予報内容

発生程度 並

## (2) 予報の根拠

7月上旬のイネ科雑草におけるすくい取り調査（28地点）の結果、捕虫網による10回すくい取りあたり虫数は7.6頭（10.2頭）であった（表）。

表 イネ科雑草でのすくい取り調査における虫数の推移

種類別	10回すくい取りあたり虫数						発生地点率	
	H24	H25	H26	H27	平年	H28	平年	H28
ホソハラカメムシ	0.7	0.9	0.3	0.9	0.5	0.4	58.7	64.3
クモヘリカメムシ	0.4	0.8	0.5	0.1	0.2	0.2	15.2	25.0
シラホシカメムシ	0.4	0.6	0.1	0.1	0.2	0.1	34.5	28.6
アカスジカスミカメ	9.0	18.4	4.2	5.5	9.1	7.2	80.7	96.4
ミナミアオカメムシ	0.0	0	0	0.0	0.0	0.0	3.4	17.9
計	9.8	21.1	5.8	6.2	10.2	7.6		

注) 数値は10回すくい取りあたりの虫数

普通期水稲
-------

## 1. いもち病（葉いもち）

## (1) 予報内容

発生程度 やや多

## (2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査（85筆）の結果、発病株率は0.0%（0.0%）、発

生圃場率は4.7%（1.7%）であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発病株率は4.0%（発生を認めない）であった。

ウ 葉いもちの感染に好適な条件を満たした日は下表のとおりである（葉いもち感染好適条件判定モデルによる。詳細はホームページを参照）。

エ 向こう1か月の降水量は平年並か多い見込みであり、本病の発生に好適である。

	長崎	佐世保	島原	平戸	松浦	厳原	芦辺	福江	大瀬戸	口之津
7月1日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月2日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月3日	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—
7月4日	—	—	—	—	—	—	●	—	—	—
7月5日	—	—	—	—	?	—	3	—	—	—
7月6日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月7日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月8日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月9日	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—
7月10日	3	—	3	—	2	—	—	3	2	3
7月11日	3	3	—	—	3	—	●	2	2	3
7月12日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7月13日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

発生指標	?:判定 不能	—:好適 条件なし	1:準好 適条件1	2:準好 適条件2	3:準好 適条件3	4:準好 適条件4	●:好適 条件
------	------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	------------

\* 感染した場合、感染好適と判断された日から7～10日後に病斑発現

### (3) 防除上注意すべき事項

ア 余り苗、補植苗は発病の伝染源となるので早めに処分する。

イ 葉いもちの急性型病斑が見られた場合は早急に防除を行う。

ウ 葉いもちの発生が認められる圃場では、穂ばらみ期と穂揃期の2回防除を行う。

## 2. 紋枯病

### (1) 予報内容

発生程度 並

### (2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査（85筆）の結果、発生を認めなかった（発病株率0.0%、発生圃場率0.1%）。

イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発生を認めなかった（発生を認めない）。

## 3. 縞葉枯病

### (1) 予報内容

発生程度 やや少

### (2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査（85筆）の結果、発生を認めなかった（発病株率0.0%、発生圃場率1.3%）。

イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発生を認めなかった（発生を認めない）。

ウ 7月上旬の巡回調査（85筆）の結果、ヒメトビウンカの株当たり虫数は0.02頭（0.05頭）、発生圃場率は7.1%（22.4%）であった。

エ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、ヒメトビウンカの株当たり虫数は0.3頭（0.1頭）、寄生株率は12.0%（5.9%）であった。

オ 6月14日発表の技術情報では、ヒメトビウンカ第一世代の縞葉枯ウイルスの保毒率は0.4%（1.4%）と低い。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア 発病株は伝染源となるので見つけ次第抜き取る。

イ ヒメトビウンカの圃場での発生に注意する。

#### 4. セジロウンカ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(85筆)の結果、セジロウンカの株当たり虫数は0.5頭(0.6頭)発生圃場率は48.2%(66.9%)であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場(無防除)調査の結果、株当たり虫数は5.3頭(2.3頭)で若・中齢幼虫主体であり、寄生株率は80.0%(68.0%)であった。

ウ 6月4半旬から6半旬を主体に平年並の飛来があった。

#### 5. トビイロウンカ

平成28年7月14日付け、**病害虫発生予察防除情報第6号**による

#### 6. コブノメイガ

平成28年7月14日付け、**病害虫発生予察防除情報第6号**による

### 大豆

#### 1. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

フェロモントラップ(諫早市)の誘殺量がやや多く推移している(図)。

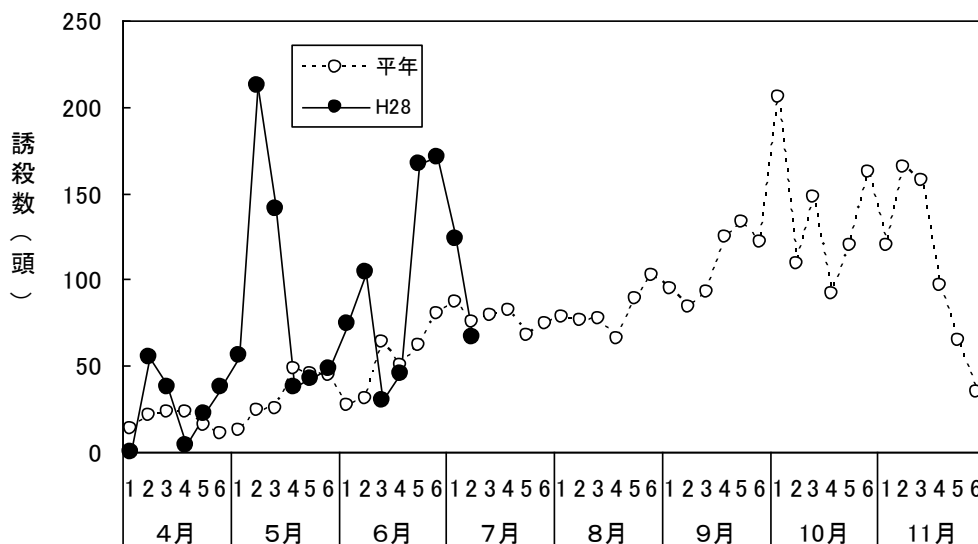


図 ハスモンヨトウのフェロモントラップにおける誘殺状況(諫早市小船越)

平年: H18~H27年の平均値(最大・最小値除く)

(月・半旬)

(3) 防除上注意すべき事項

ア 圃場の見回りを徹底し、白変葉が散見され始めたら早急に防除を行う。

イ 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので、若齢幼虫期に薬剤散布する。

いちご

1. うどんこ病

(1) 予報内容

発生程度 少

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(33筆)の結果、発病株率は0.01%(2.6%)、発生圃場率は3.0%(27.7%)であった。

2. 炭疽病 (G. cingulata)

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(33筆)の結果、発病株率は0.03%(0.01%)、発生圃場率は6.0%(2.6%)であった。

イ 向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量も平年並か多い見込みのため、本病の感染に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗床が多湿にならないように、長時間のかん水はしない。ポット間隔を十分にとり、排水対策を確実に行う。また、除草を徹底するなど、環境整備に努める。

イ 育苗床は全面マルチを行い、降雨等による地面からの病原菌の跳ね上がりを防止する。また、雨よけ施設がある育苗床では雨よけを行う。

ウ 発病した子苗およびその周辺の株は速やかに処分する。また、発病した親株から採苗した子苗は育苗せずに処分する。除去した発病株や茎葉は、圃場内やその周辺に放置しない。

エ 葉の展開間隔にあわせて定期的に薬剤防除する。特に長雨、台風などの前後、下葉除去など株を傷つけるような作業後は重点的に行う。

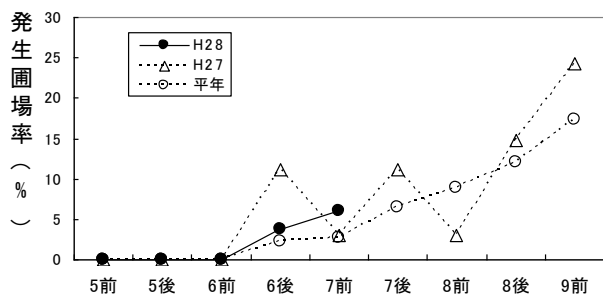


図 炭疽病 (G. cingulata) 発生圃場率の推移

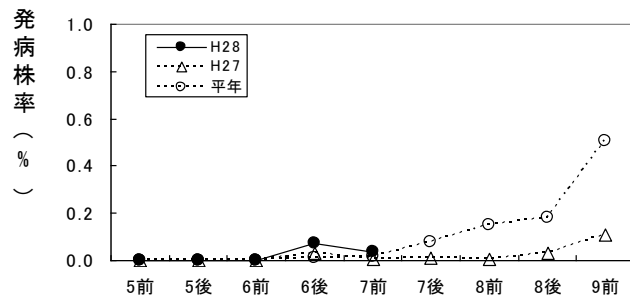


図 炭疽病 (G. cingulata) 発病株率の推移

3. 輪斑病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(33筆)の結果、発病株率は3.5%(6.0%)、発生圃場率は45.4%(44.1%)であった。

4. ハダニ類

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(33筆)の結果、寄生株率は3.5%(1.7%)、発生圃場

率は21.2%（16.3%）であった。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本圃への持込みを避けるため、定植までの防除対策を徹底する。
- イ 下葉の裏に多く寄生するので、薬液が葉裏に十分かかるように丁寧に散布する。
- ウ 薬剤感受性が低下しやすいので、同一系統の薬剤は連用しない。
- エ 薬剤感受性低下の恐れが少なく、土着天敵に影響の少ない気門封鎖剤を活用する場合、これらの薬剤は卵に対する効果が低いので5～7日おきに連続散布を行う。

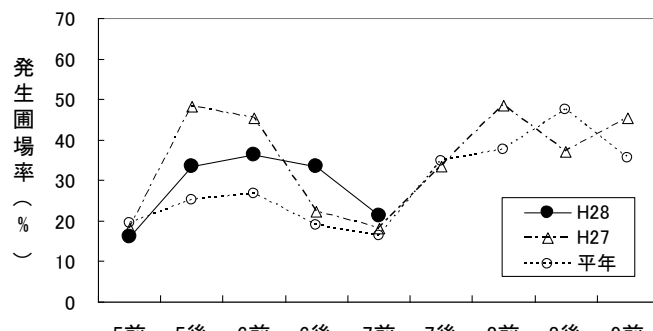
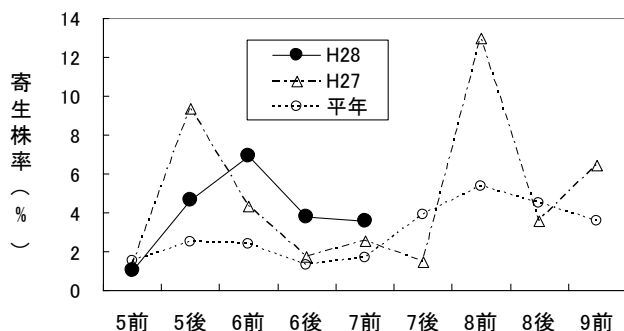


図 ハダニ類 寄生株率の推移

図 ハダニ類 発生圃場率の推移

アスパラガス

1. 斑点性病害

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査（12筆）の結果、発病側枝率は0.4%（過去9カ年平均0.8%）、発生圃場率は16.7%（過去9カ年平均26.2%）であった。

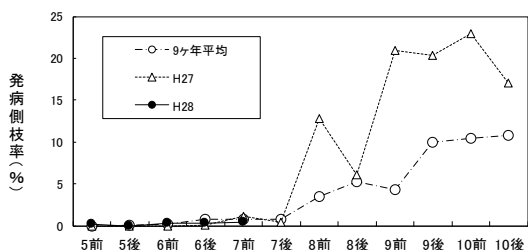


図 斑点性病害発病側枝率の推移

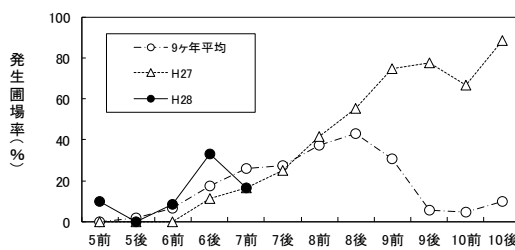


図 斑点性病害発生圃場率の推移

2. アザミウマ類

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査（12筆）の結果、払い落とし虫数（10.5cm×22.5cmの白色板に5回×10ヶ所）は16.7頭（過去9カ年平均10.0頭）、発生圃場率は66.7%（過去9カ年平均73.4%）であった。

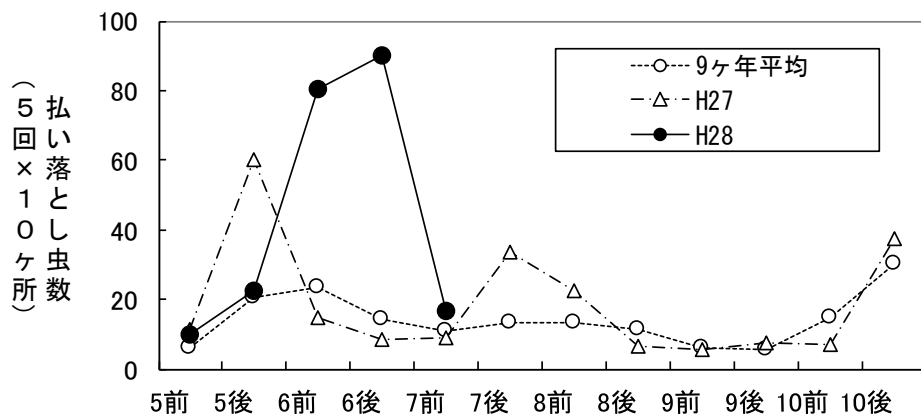


図 アザミウマ類 払い落とし虫数の推移

※払い落とし虫数は成虫、幼虫の合計

## かんきつ

### 1. かいよう病

#### (1) 予報内容

発生程度 やや多

#### (2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(36筆)の結果、発病葉率は0.6%(0.3%)、葉の発生圃場率11.1%(14.2%)であった。発病果率は0.0%(0.1%)、発生圃場率2.8%(4.2%)であり、一部多発圃場があった。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 発病枝や葉は伝染源となるのでできるだけ除去する。

イ 強風による傷から感染しやすいので、今後の気象状況に注意し、台風が予想される場合は台風接近前に薬剤散布を行う。

ウ 銅剤は高温期に散布すると薬害を生じることがあるため注意する。また、薬害防止のため農薬のラベルに従い、炭酸カルシウム水和剤(クレフノン等)を混用する。

### 2. 黒点病

平成28年7月14日付け、**病害虫発生予察防除情報第7号**による

### 3. ミカンハダニ

#### (1) 予報内容

発生程度 やや多

#### (2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(36筆)の結果、寄生葉率は17.5%(9.4%)、発生圃場率は50.0%(48.4%)で、一部多発圃場があった。

### 4. チャノキイロアザミウマ

#### (1) 予報内容

発生程度 やや少

#### (2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(36筆)の結果、被害果は認められなかった(被害果率0.7%、発生圃場率11.4%)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 気象庁アメダスの気温データを用いて有効積算温量により算出した発生ピーク予測日を下表に示した。

イ 茶、かき、ぶどう及びイヌマキなどから移動して加害することがあるので、それらでの発生にも注意する。

表 有効積算温度計算シミュレーションによるチャノキイロアザミウマ成虫の発生ピーク予測日

地点	長崎	佐世保	大瀬戸	口之津	平戸
第2世代	<b>5/30</b>	<b>5/31</b>	<b>6/7</b>	<b>5/31</b>	<b>6/11</b>
〃 (前年)	6/4	6/4	6/13	6/5	6/17
〃 (平年)	6/9	6/16	6/16	6/11	6/22
第3世代	<b>6/22</b>	<b>6/24</b>	<b>7/1</b>	<b>6/24</b>	<b>7/6</b>
〃 (前年)	6/30	6/29	7/10	7/1	7/13
〃 (平年)	7/1	7/7	7/9	7/2	7/14
第4世代	<b>7/12</b>	<b>7/14</b>	<b>7/21</b>	<b>7/13</b>	<b>7/25</b>
〃 (前年)	7/20	7/20	7/30	7/22	8/3
〃 (平年)	7/20	7/26	7/28	7/21	8/2
標高(m)	27	4	43	10	58

注1: 発生ピーク予測日は気象庁アメダスの気温データを用いて有効積算温量により算出した。なお、積算には2016年6月12日までは観測値を、以降は平年値を使用した。

注2: 同一地区内でも、山間部では予測発生ピーク日が異なる場合があるので注意する。また、今後の気象条件により予測日は前後する場合がある。

注3: 表中の発生ピーク予測日の5日前から発生ピーク予測日の期間に薬剤散布をすると防除効果が高い。なお発生が多い園では、1果当たり寄生虫数が0.1頭に達する前に防除を行う。

ウ 黄色粘着トラップ（諫早市）の誘殺量（図）は、平年に比べ少なく推移しているが、本種の発生状況は園地の条件や地域間で異なる場合があるため、園地での発生状況の把握に努め、適期に防除を行う。

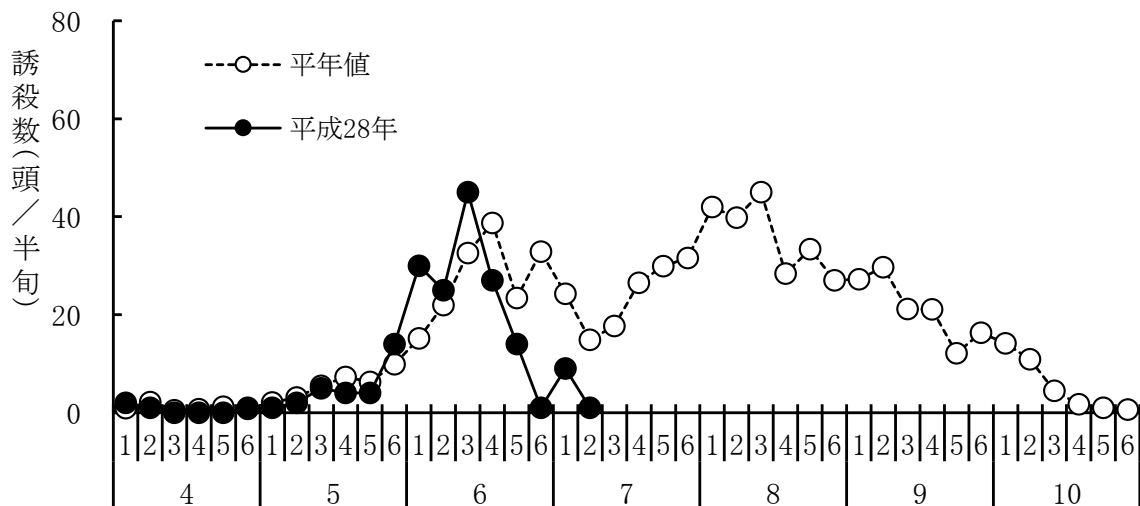


図 チャノキイロアザミウマの誘殺状況 (諫早市小船越町:黄色粘着トラップ) (月・半旬)



# びわ

## 1. がんしゅ病

### (1) 予報内容

発生程度 やや少

### (2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(10筆)の結果、発病枝葉率は0.2%(1.4%)、発生圃場率は10.0%(41.3%)であった。

## 2. 灰斑病

### (1) 予報内容

発生程度 並

### (2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(10筆)の結果、発病枝葉率は30.2%(35.1%)、発生圃場率は100%(97.5%)であった。

## 3. ナシヒメシンクイ

### (1) 予報内容

発生程度 並

### (2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(10筆)の結果、枝葉への寄生を認めなかった(寄生枝葉率0.0%、発生圃場率2.5%)であった。

イ フェロモントラップ(諫早市)の誘殺量は、平年並で推移している(図)。

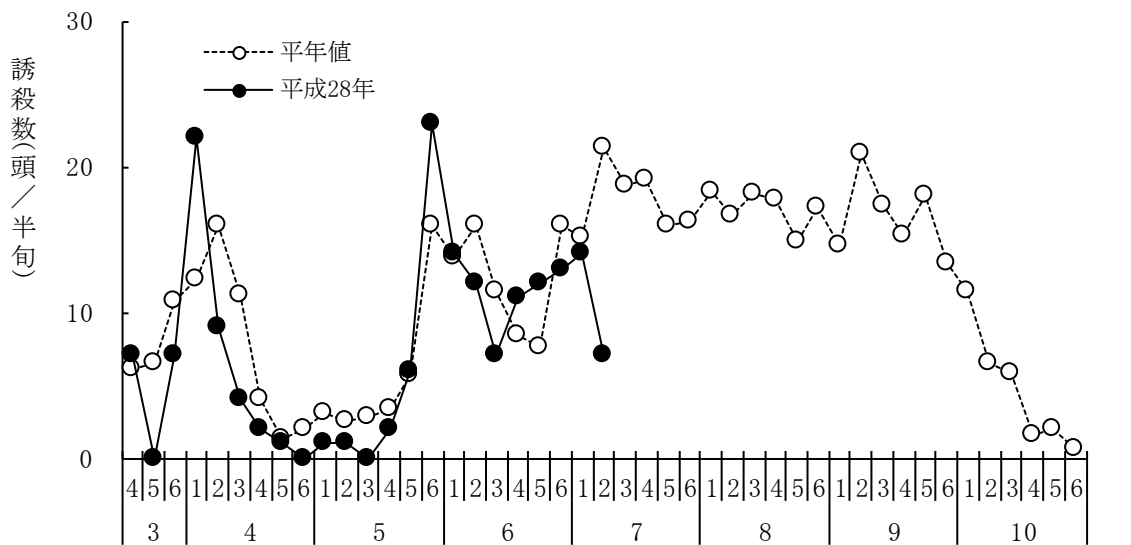


図 ナシヒメシンクイの誘殺状況  
(諫早市小船越町:フェロモントラップ)

# なし

## 1. ナシヒメシンクイ

### (1) 予報内容

発生程度 並

### (2) 予報の根拠

フェロモントラップ(諫早市)の誘殺量は、平年並で推移している(びわの項図参照)。

## ぶどう

### 1. べと病

#### (1) 予報内容

発生程度 やや多

#### (2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査（12筆）の結果、発病葉率は1.7%（2.8%）、発生圃場率は16.7%（34.3%）であった。

イ 向こう1か月の降水量は平年並か多い見込みであり、本病の発生に好適である。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 降雨後の乾燥を図るため、枝梢管理を適切に行って、通風、採光を良くする。

イ 降雨が多いと多発するので、天候を見ながら防除を徹底する。

## 果樹共通

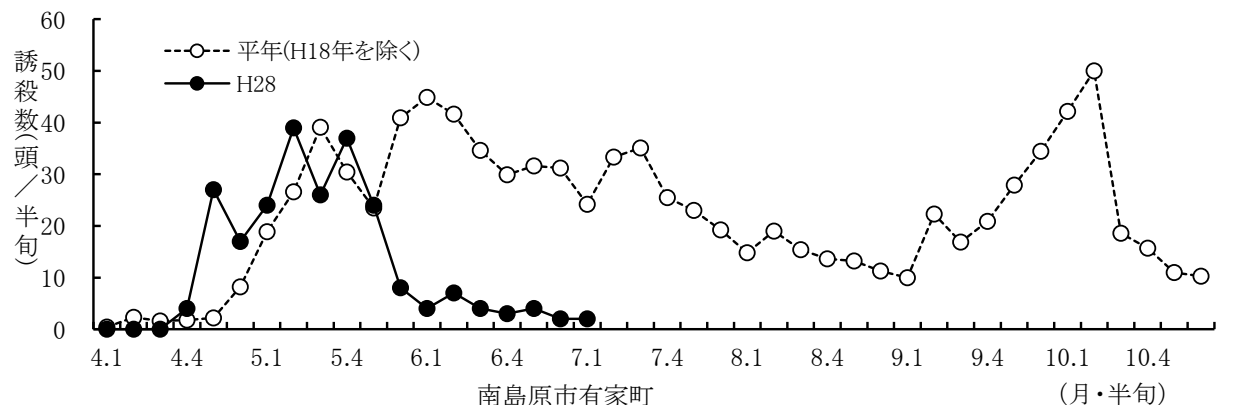
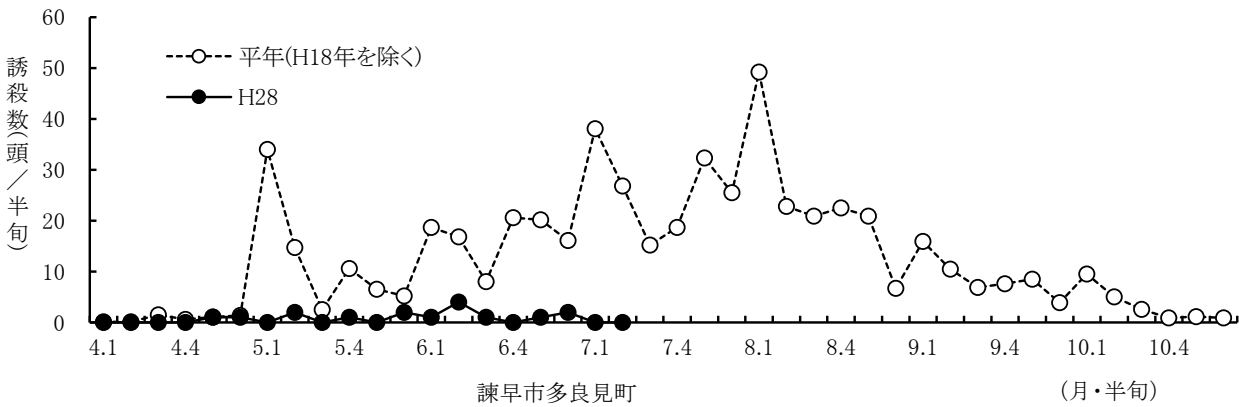
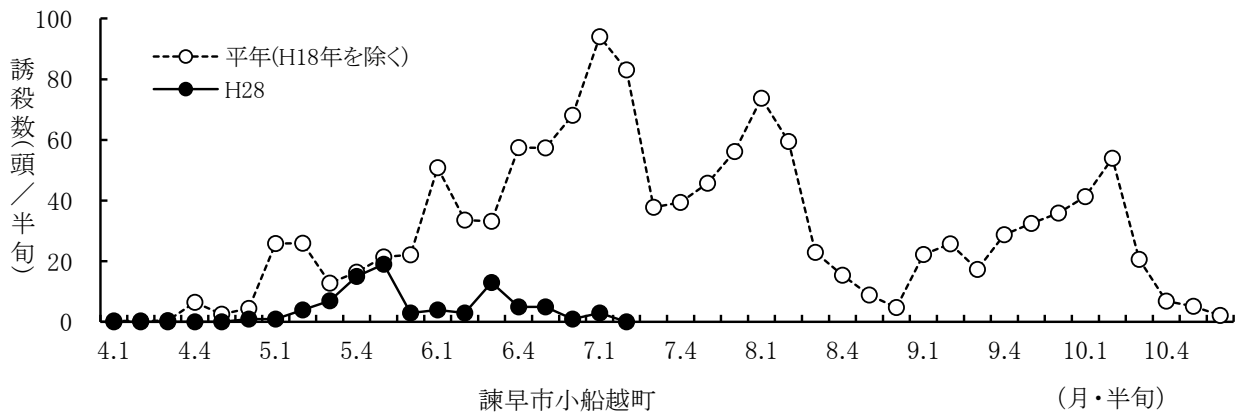
### 1. カメムシ類

#### (1) 予報内容

発生程度 少

#### (2) 予報の根拠

フェロモントラップの誘殺量は、県下全域で平年に比べ少なく推移している。



# 茶

## 1. 炭疽病

### (1) 予報内容

発生程度 やや多

### (2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査（20筆）の結果、1㎡あたり発病葉数は4.7枚（3.3枚）、発生圃場率は95.0%（53.1%）であった。

### (3) 防除上注意すべき事項

薬剤耐性発達防止のため、同一系統の薬剤を連用しない。

## 2. チャノキイロアザミウマ

### (1) 予報内容

発生程度 並

### (2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査（20筆）の結果、たたき落とし虫数（A4版トレイ）は6.5頭（10.5頭）、発生圃場率は75.0%（82.5%）であった。

## 3. チャノコカクモンハマキ

### (1) 予報内容

発生程度 並

### (2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査（20筆）の結果、1㎡当たり巻葉数は0.4枚（0.1枚）、発生圃場率は15.0%（9.4%）であった。

イ フェロモントラップによる誘殺量（農林技術開発センター茶業研究室調査）は、平年並で推移している（図）。

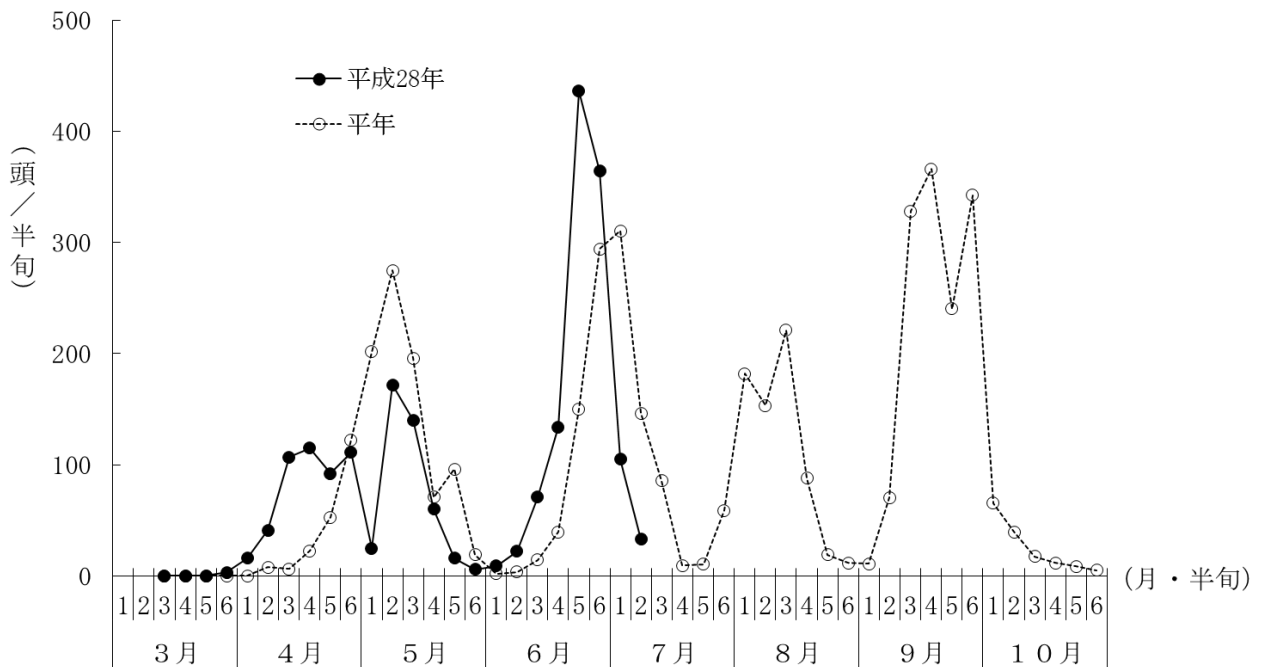


図 チャノコカクモンハマキの誘殺状況（東彼杵：フェロモントラップ）

## 4. チャノホソガ

### (1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(20筆)の結果、1㎡当たり巻葉数は0.1枚(0.1枚)、発生圃場率は5.0%(7.5%)であった。

イ フェロモントラップによる誘殺量(農林技術開発センター茶業研究室調査)はやや多く推移している(図)。

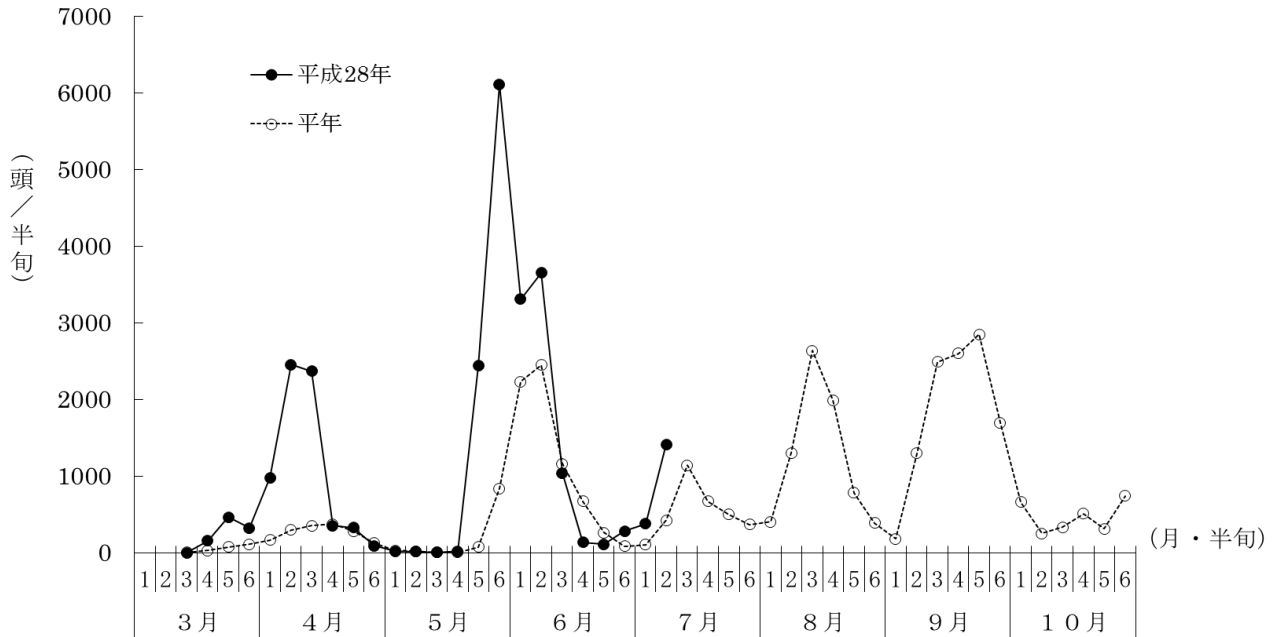


図 チャノホソガの誘殺状況(東彼杵:フェロモントラップ)

5. カンザワハダニ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(20筆)の結果、寄生葉率は0.2%(0.1%)、発生圃場率は10.0%(6.3%)であった。

6. チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(20筆)の結果、たたき落とし虫数(A4版トレイ)は1.8頭(2.9頭)、発生圃場率は65.0%(64.4%)であった。

7. クワシロカイガラムシ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(20筆)の結果、寄生株率は6.3%(5.7%)、発生圃場率は35.0%(36.9%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 1回脱皮してロウ質のカイガラを作りはじめると薬剤の効果が低下するので、下表のふ化盛期予測日を参考にし、ふ化盛期~5日後までに防除する。

イ 株内の枝や株元に薬液がかかるように十分量散布する。

表 「有効積算温度則による防除適期予測法」によるクワシロカイガラムシのふ化盛期予測日（第2世代）

地区名	標高(m)	平成28年	平成27年	平成26年	平年 (過去10カ年)
東彼杵町太の原	360	7/19	7/23	7/29	7/25
五島市上大津	77	7/10	7/18	7/16	7/15

注1：方法は「有効積算温度則による防除適期予測法（農林技術開発センター茶業研究室）」により、7月1日時点で予測した。

注2：使用する気温データは、農林技術開発センター茶業研究室（東彼杵町）の測定値及びアメダスデータ（五島市）を使用し、予測日以降の気温データは平年値を使用した。

なお、第1世代のふ化盛期を、東彼杵町太の原は5月15日、五島市上大津は5月4日とした。

注3：同一地区内でも標高や土地条件でふ化盛期日が異なるので注意する。

